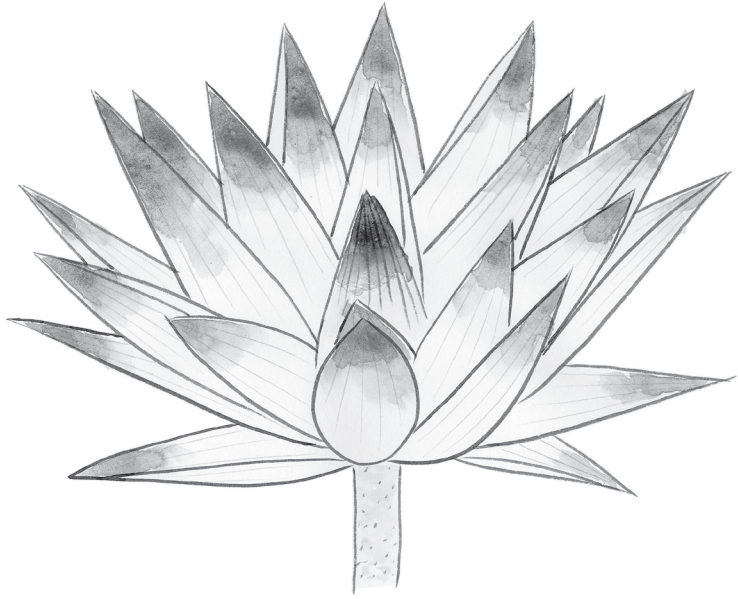
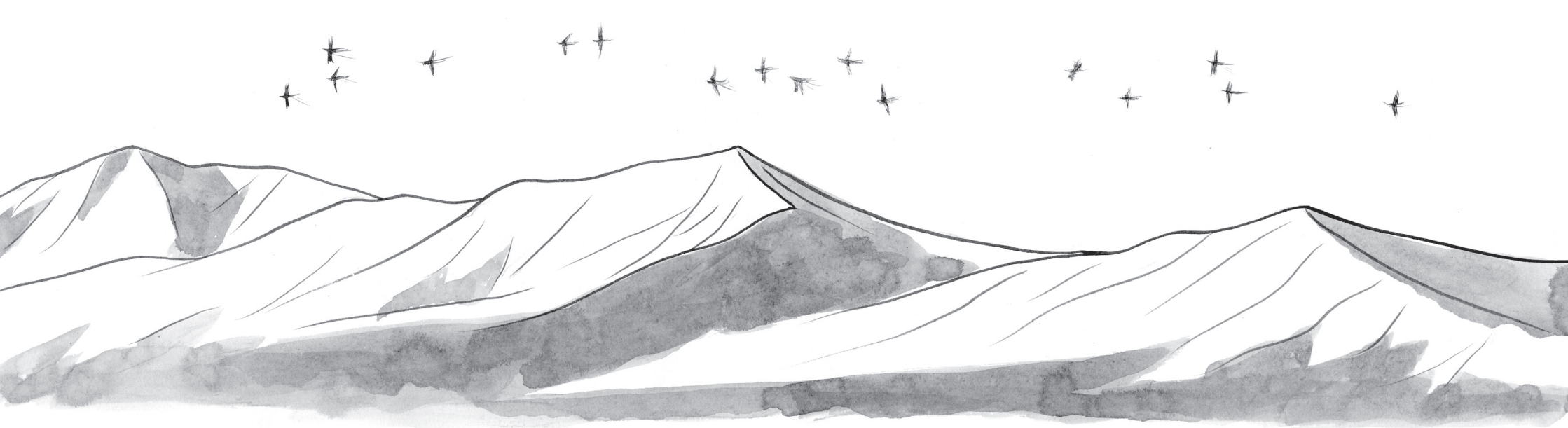


仏典  
童話集





## 目次

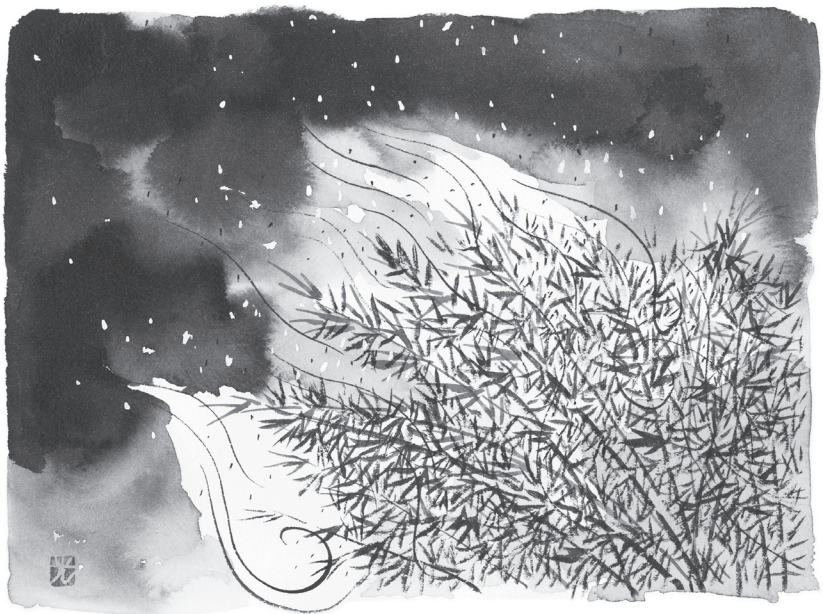
羽の水……………	4
なくならない体……………	10
こえかつぎニダイ……………	16
紙くずのたとえ……………	22
高い石の塔……………	28
二つの口のあらそい……………	34
母親さばき……………	40
消えないともしび……………	46
山賊と少女……………	52
すがすがしい顔……………	58
二つの穴……………	64
一わんのかゆ……………	70
草の日笠 <sup>ひがき</sup> ……………	76
琴の音 <sup>こと</sup> ……………	82
親の恩……………	88
宝物のねうち……………	94
はとの王さま……………	100
いのちの不思議……………	106
象とはどんな生きものか……………	112
もらえない火……………	118
あとがき……………	124

# 羽の水

ヒマラヤの山々のふもとに広がる大森林のはしに、太い幹の竹林がありました。そこには、たくさん動物たちが仲良くくらししていました。

ある時のこと、竹林に激しい嵐がおそい、竹と竹がすれ合って火が出ました。火は風にあおられて、みるみるもえ広がりました。ゴーゴーとうずをまいてもえさかる炎の下で、動物たちは逃げまどい、つぎつぎ命を落としていきました。

この竹林に、一羽のおうむが住んでいました。おうむは火事に気がつくど、だれよりも早く空に舞いあがりました。



「助<sup>たす</sup>かった。よかった」

でも、そのまま逃げ去<sup>さ</sup>ることは、どうしてもできませんでした。このままでは、みんなやけ死んでしま<sup>う</sup>、なんとかして助けたい。おうむの胸<sup>むね</sup>は、早鐘<sup>はやがね</sup>のようになっていました。

「そうだ」

おうむは思わず大<sup>おお</sup>声<sup>こゑ</sup>をあげると、矢<sup>や</sup>のように飛<sup>と</sup>び立<sup>た</sup>っていききました。

ふもとに小さな池<sup>いけ</sup>がありました。おうむはそこに飛<sup>と</sup>びこむと、羽<sup>は</sup>に水をふくませ、急<sup>いそ</sup>いでもえさかる竹林の上へ飛<sup>と</sup>びました。そして、羽<sup>は</sup>をふるって水のしずくをふりかけると、すぐまた池へ引き返<sup>かえ</sup>りました。なんども、なんども、おうむは死<sup>し</sup>にものぐるいで、池と竹林のあいだを往復<sup>おうふく</sup>しました。

羽<sup>は</sup>にふくませて運<sup>は</sup>べる水<sup>みづ</sup>など、わずかです。でも、たとえわずかでも、火<sup>ひ</sup>を消<sup>け</sup>す力<sup>ちから</sup>になるかも知<sup>し</sup>れません。

おうむの目<sup>め</sup>は血<sup>ち</sup>ばしり、羽<sup>は</sup>はつかれ、もうどこをどう飛<sup>と</sup>んでいるのかさえわからなくなりました。ただ心<sup>こゝろ</sup>だけが、早く早くとせきたてていました。

おうむはついに、つかれきって草<sup>くさ</sup>むらに落ち<sup>おち</sup>てしまいました。もうどんなにしても、羽<sup>は</sup>はびくとも動<sup>うご</sup>きませんでした。

その時<sup>とき</sup>、夢<sup>ゆめ</sup>ともうつつとも知<sup>し</sup>れない、ぼんやりとした頭<sup>あたま</sup>の中に、すき通<sup>とほ</sup>ったやさしい声<sup>こゑ</sup>が聞こえてきました。

「おまえが運<sup>は</sup>んだあのわずかな水<sup>みづ</sup>ぐらいで、火<sup>ひ</sup>事を消<sup>け</sup>せると思<sup>おも</sup>ったのかね」

「いいえ」

おうむは、言いました。

「それは、わたしにはわかりません。でも、みんなが死んでしまうと思  
うと、そうするよりなかったのです」

目には見えませんが、その声はなんだかうなずいたように、おうむに  
は思えました。

その時です。急に空いちめん黒雲がわき起こったかと思うと、はげし  
い雨がザーザーとふり始めました。その雨で、火事を見るまに消えてし  
まいました。

おうむがふと気づくと、雨はすっかりあがって、青空が広がっていま  
した。

(さっき、わたしに声をかけ  
た方は、いったいだれだろう)

おうむは、思いました。

(いつもやさしく、わたしを  
見守ってくださいっている、仏  
さまにちがいない)

出典 『旧雑譬喻経』

